

審査官の国際交流

巻・頭・言

特許庁技術懇話会 常任委員 高橋 克



私の審査官としての国際交流で最も印象に残っているのは、初の海外出張で、オランダのハーグの欧州特許庁を訪れた時のことです。それまで海外出張経験のなかった私は、深く考えずに関係書類を全てスーツケースに詰めて出発したのですが、紙の書類は想像していた以上に重く、スーツケースと相性の悪いオランダのデコボコな石畳の道を汗だくで移動したことは、今となっては良い思い出です。

初の海外出張では、自分自身の語学力も心配の種でした。私はどちらかと言うと口下手な方で、日本語でも相手に自分の意見をうまく伝えられずに苦慮することが多いような人間でしたので、初めて話す相手に自分の英語がどこまで通じるのか、相手の意図を理解することができるのか、そんな不安と緊張の中、出張の準備を進めたものです。

ところが出張初日を迎えてみると、カウンターパートとは、自分の英語力が上がったのではないかと錯覚するほどスムーズにコミュニケーションを取ることができました。それは、同じ技術分野を担当している審査官が直面する問題や悩みというのはほとんど一緒で、短い言葉であっても相手の言わんとしていることが何となく理解できてしまうからでした。どのような観点で分類体系を構築するか、他の技術分野との切り分けはどのようにすべきか、分類付与やサーチが困難な技術はどのようなものか、新規性・進歩性の判断時に気をつけるべき点は何か——そんなカウンターパートの説明は、新鮮でありながら一つ一つが共感できるもので、「技術は言葉の壁を越える」ということを強く実感できた貴重な経験でした。

しかし、カウンターパートに対するそんな親しみのこもった共感が別の悩みに繋がっていったことも事実です。大筋で相手の考え方が理解できるからこそ、私と違うように考える点に関してその理由が却って理解できなかったからです。カウンターパートにどれだけ言葉を積み重ねて説明しても理解してもらえなかったり、逆にカウンターパートが

特定の問題にこだわる理由が全く理解できなかったりして、徒労感のうちに1日が終わることもありました。互いに言っていることが通じない議論は、非常に疲れるものでした。慣れない英語での議論であれば尚更です。

そのような状況の中、共に欧州特許庁を訪れた同僚との反省会を兼ねた夕飯は、私を元気付けてくれる何よりの救いの場となりました。その日の議論の失敗談やカウンターパートの無理難題などに対するちょっとした愚痴の言い合いが気持ちを楽にしてくれた上に、同僚から教えてもらった話が、私一人ではどうしても解けなかったパズルの鍵となり、カウンターパートや欧州特許庁の文化や考え方の理解の助けとなったからです。単身での出張であったとしたら、私はその鍵を拾う機会がなく、カウンターパートや欧州特許庁に対する印象や出張の結果も全く違うものになったかもしれません。

このように振り返ってみると、初の海外出張で同僚に恵まれた私は、大変幸運だったと思います。審査官としての海外出張は、基本的には審査官同士の一対一の議論がメインで、一つのチームとして相手と会議を持つものではないですから、私のケースとは異なり、現地で孤軍奮闘をせざるを得ない人も多くいたのではないのでしょうか。そのような観点からすれば、日本の審査官同士が横の繋がりを持ち、相手国・機関の文化や考え方について理解を深める機会がもっとあっても良いのではないかと考えます。

特技懇では、今年度から審査官の国際交流をサポートするための取り組みを進めています。検討を始めたばかりでまだ手探りの状態ですが、この取り組みを通して審査官協議などで外国の審査官と交流する日本の審査官の活動を支援することができれば、と考えています。「会員のために、今、特技懇は何ができるのか」という視点に立ってあらゆる可能性を検討していきたいと思います。皆さんからのご意見等もお知らせ頂ければ幸いです。